

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十五年六月二十五日印刷 昭和四十五年七月一日発行

第三十六卷

第七号



目次

表紙「蓮」松濤達文画

盆会に思う……………	一条智光…………	(2)
念仏と生活 一教えのまにに……………	中島真孝…………	(5)
念仏生活シリーズ① めぐりあい……………	高麗義光…………	(10)
シャンゼリゼーで南無阿弥陀仏……………	大久保文雄…………	(13)
大師のおやま(上) 一霊峯・高野山……………	増田任雄…………	(14)
お念仏とお題目……………		(17)
遠くなったふる里……………	安居香山…………	(18)
綾子の家出(上)……………	吉野翠幹…………	(22)
読者のたより ・観無量寿経をひもといて……………	上野浩…………	(26)
道② 広谷への道……………	高橋良和…………	(29)
宝物シリーズ⑥ 鎌倉時代の治病のいろいろ……………		(32)



今月のことば

みどりも深く、日本の四季はそれぞれ美しい。サバクの国土にくらべれば、四季それぞれの特色を持ち有難いくにであります。どこまでも、このよい自然を護りそだててゆきたいものです。西欧のくにぐには自然を征服するもので、東洋は自然と共に生きるものであると、よく言われる。しかし、西欧とても自然を重じないわけではない。生活のなかに充分自然を取り入れていると思われる。都市化のはげしい日本においても、自然を愛せよ、という声は高い。

仏法に法爾自然ということばがあります。宗祖法然上人の御名前も、この上と下をとられたものと思われまゝす。ほうにじねんとは、自然のままということす。そのままでもよいかとも思いますが、ただ自然にまかせよということではありません。自然は法（真理）にしたがつて運行しているものであります。あみだぶつの御徳も法爾であります。その御徳とは、無量寿、無量光であります。

かぎりなき生命の世界は自然に働きつづけております。あみださまは無限にお働きになつております。人間のいのちも、四季のうつりかわりの自然も法爾でなくてなんでありましょう。みどり深い若葉を泌々とながめっていると自然にお念仏がささやかれてまいります。人々もいろいろの若葉のように、四季おりおりの花のように薫り高く、みどり深く、かがやきにかがやきます。法爾の世界です。自然です。無量光も、人も自然もおしなべててらしています。青葉若葉の日の光りこそ、人の光りでもあります。青きものは青き光りを放ち、赤きものは赤き光りを放ち、人各々特色をもってその光りを放つ。有難き哉。

法然上人のみ名をおよびする時、この真実がひびき、聖き念仏をとなえる時、法然上人の温容がまぶたにうかぶ。

（佐藤良智）



＝長野善光寺大本願御法主＝

一条 智光

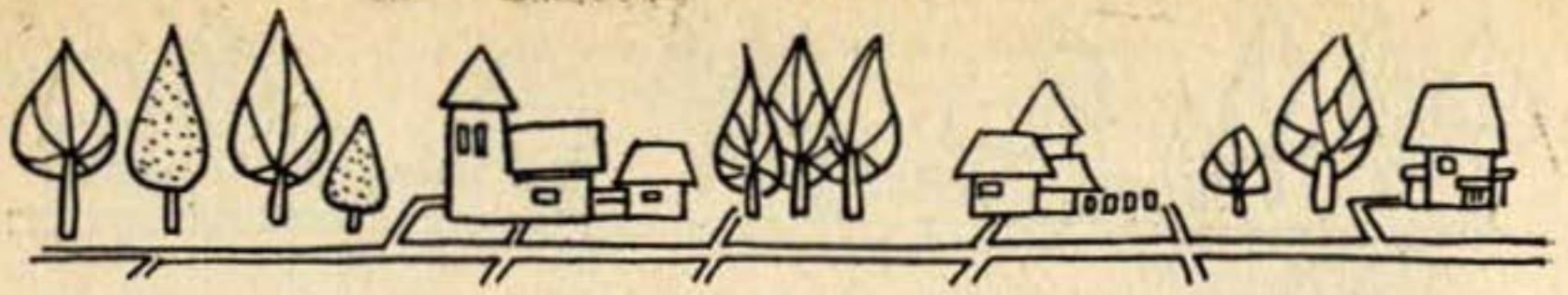
今年もお盆の時期を迎えましたが、盂蘭盆会と云い魂まつりとも呼ばれ、御先祖の霊を迎えてその冥福を御祈りして恩恵を感謝し加護を念ずる行事であることは、皆様よくご存じの所であります。

この御先祖を祀るということも、今日では国民全体を通じて眺めますと、次第に変わってきているように思われます。一方にはまだまだ御先祖を始め亡くなった方を大切に祀るべきものという考えが根強くあるかと思えば、他方では、どうしてもよいという考えの人も非常に多くなっているように受けとれます。むしろ死んだ人を思い出して祀るというのは、丁度うしろを向いて走っているようなものだ今日は前を向いて走ってさえも生存競走に負ける世の中じゃないか、いくら御先祖が大切だといっても、過去にしかすぎない。それよりも現に生存している者を大切に、生活をたのしむべきだと、こういう考え方が多くなっているようでもあります。ですから御参りしないことが一見識高いもののように考えられ、又文明人と考えている人があるやに受け取られる訳であります。

勿論一概には云えませんが、家族制度の廃止にともない、家庭に於ての祖先崇拜の思想は急速に衰えつつあるといわねばなりません。

現に行われて居ります行事は習慣としてのもので、形だけのもの、何等そこには今迄の様に自己をかえり見、お蔭さまを知る深い意味は、ふくまれていないのではありますまいか。年寄りがうるさいから、世間や親類の手前といったものが感じとられます。

斯様にお盆まつりも形式化して居りますけれど、永年の間続けられて来た、この行事の中に、自覚すると否とは別として、御先祖を思い、肉親を偲ぶこまやかな心が宿されていることは事実のようであります。

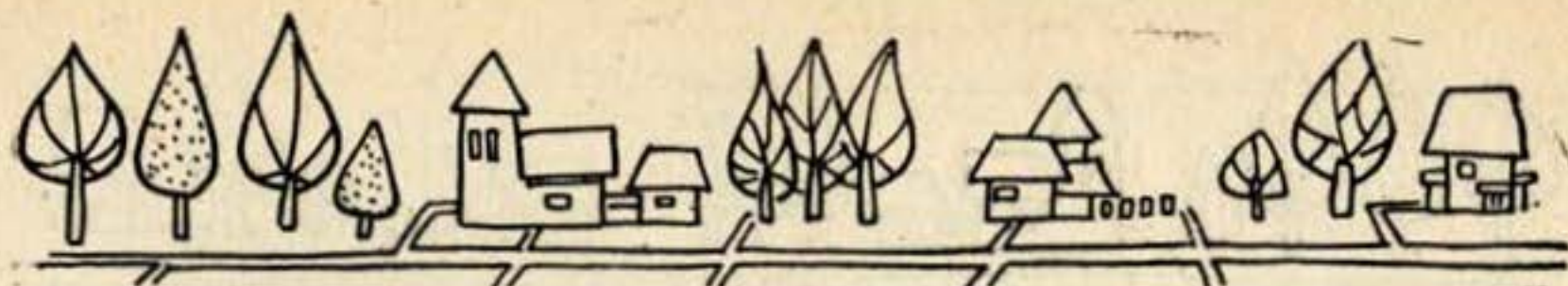


盆会に思う

善光寺に於ては、例年七月三十一日の晩、盂蘭盆法要を厳修致しますが、毎年戸隠方面を始め近郊の方々のお参りが沢山あります。特に初盆を迎える御霊のある家は、本堂におこもりをして一夜を明かすのが慣しのようなのですが、その習慣も次第に少くなりつつあるのが現状であります。それでも今もなお、必ずお参りをされる方がいるのは喜ばしいことです。その中に善光寺独特の御珠数頂戴の折も真先にお位牌を私の目の前につき出し、お願い致しますと云う人があるかと思えば、授与十念の折にも、高々と位牌を捧げ、少しでも御仏と御縁を結ぼうとしているかのようにさし出している人もあり、真に純情そのもので斯様に亡き人が目前にいますが如く御位牌を大切にされる姿は美しいものに思います。

一片の木きれではないかと云えば、それまでかも知れません。しかしその位牌という木を通じ又墓という石を通じて御先祖を思い、父母を偲ぶ、即ち、物質を通じて人格を感じることが出来るので、人間の情愛の尊さを知る訳であります。

とに角、お盆行事は、御先祖の恩恵と、父母の慈愛に報いようとする人々の美しい心柄によって続けられてきたのです。各地に於てかずかずの風習の中に、御先祖を想う心が生き続け、受けつがれて来たのでありますが、是はいがみ合う、せまい人と人の心をゆたかに通い合せ、社会と人とのあり方を、温かい人情自然のあらわれの中に、くみして来たのではありますまいか。私はこのとけ合い、通い合った心持は尊いもので、清らかな人間の真情が顕われていると思います。此処にこそ御先祖まつりの意義があると思うのです。私共は、人それぞれの違いはありますけれど、悩みや矛盾があるもので、何等かの心のより所が欲しいものです。それが御先祖であつてもよし、更に、御先祖をまつると云う宗教行



事を通じて御仏の御教えを頂くことであれば尚更結構であります。私共の人間性を豊かに培う上にプラスになるものと信じます。

しかし、只今の世の中は如何でしょう。御恩とか感謝とか忘れていくように思います。私の力によって現在の生活が成り立っているように思っていますが先づ第一に生命の源である御先祖あつての私であり、大自然や多くの人達の有能無形のお蔭様によって生かされていく自分であることを忘れて居ります。

相互互助の中に私の生活があることを自覚いたしたいもので、此処にはじめて感謝の氣持がはぐくまれるのです。若い人の中には、「恩って何ですか」という質問をする人さえありますが、是は自主的に、或は自我のめざめ、自立の大切さ等々が、はきちがえられて個人主義、権利の思想のみが成長し、生かされる有難さ尊さを知らない人が多くなつたからではありますまいか。

一年一度お盆を勤める事は結構なことです。たとえ習慣としてでも肉親を思う美わしい、やさしい日本民族の心の顯れとして受け継ぎたいものです。そして恩を知り有り難うと感謝の念を養う機会と致したいものであります。

家族制度はなくなりましても、家庭が人間の魂の故郷であることに変わりはない筈でありますから、心のゆたかさ、互譲互助の心がまえを育てる上にも、現代にふさわしい心のより所である家庭を作ることが願わしいことでもあります。その意味に於てもお盆こそ心を温め合うよい機会と思います。

又、混乱の世の中、断絶の家庭をして明るい家庭を築き、平和な社会をもたらす為にも、お盆行事を大切に受け継ぎ、意義あらしめたいものと思います。



念仏と生活

|| 教えのままに ||

中 島 真 孝

(東京・青山梅窓院住職)

一、若き日の回顧

「念仏と生活」ということ、私にとりましては、四十有余年にわたる教鞭生活ぬきには考えられません。けれど、こういういい方が当てはまるかどうかは知りませんが、若い頃から念仏に興味をもっていたことは事実です。

私は芝中学校第二回の卒業ですが、当時は浄土宗第一教区宗学教校という、大変ながい名前の学校だったので。その三年のとき、学校は文部省の認定を受け中学校

となりましたので、四年のときに編入し、芝中学校の課程を受けながら、放課後、仏教学の講義を受け、更に卒業ののち、半年ほど特別講義を受けて、そして浄土宗第一教区宗学教校という宗侶養成機関を卒業し、一人前の僧侶の資格を得たのです。

それから、高等師範学校（現東京教育大学）に入学いたしました。その三年のとき、小石川の伝通院でんつういんにおいて、夏休みに学生のために開かれた特別の行ぎょうを受けたのです。その時の同行に、現浄土門主の岸信宏しんこう下や田中木叉先生がおられました。

その行中、私なりに念仏を称えましたが、その記録として「礫川日記れきせん」というものを記しました。しかし、今

ではどこかへ紛失してしまい残念に思っておりますが、その日記の最後は、「如来さま、どうぞお許し下さい。私はまた学校へもどらねばなりませんので、お念仏を申せません。しばらくご猶予下さいませ」と、結んだことを、今もはっきりと覚えております。

とにかく、学校を出れば教員生活に入ってしまう訳でしたので、この機会をのがしては念仏を称えるときがなくなってしまうという意気込みで、心魂一徹の行生活を送ったことは事実であります。

その後は、教員としての生活に追われ、充分落ちついて念仏を称える機会も少なくなっていました。

けれども、幸いに伝通院での行中ご一緒いただきました田中木又先生のお誘いで、椎尾弁匡上人や山崎弁栄上人のお話しをよく聞きに出かけました。弁匡上人のお話は芝の常行院で行なわれましたが、その帰結は「南無」で終るという立場をとられ、一方弁栄上人は同じ芝の観智院が会場でしたが、「南無」から始まるという立場をとられました。両上人のお話を聞くごとに、まったく反対の立場をとられていたにもかかわらず、なるほどと感心して、やはり念仏はいずれにしても申さねばならない

ものだということを教えられたのであります。

二、三万遍の念仏への道

その後、アメリカへ四年間留学し、教育学を専攻しました。その関係で、帰国後は大正大学で教育学などの教鞭をとりましたが、五十歳の時に一念発起し、真（まこと）の仏教をひろめねばと考えたのです。

ところが丁度淑徳学園の原田靈道先生がお亡くなりになり、私に後任の校長をとという話がおこりました。一度は念仏の生活をと決めたのですが、教員という職業は大変のしいもので、私の性分に合っていたのかも知りません。大変迷いましたが、気持がぐらつき、承諾することになったのです。

その後しばらくして、今度は大村桂巖先生が大正大学長にご就任になるについて、芝学園長との話が出ました。芝学園ならばわが母校であり、渡辺海旭先生のあとを継げる、男一匹やらなければと、五十歳の堅い決心な人のその、淑徳学園から芝学園へかわりました。この頃は丁度戦時中、学徒動員や何やかやと、大変気をつかつ

たものです。

こうして、終戦後しばらくして芝学園を辞し、ぶらぶらしておりましたが、ハワイ開教区の総督として行つてはどうかという話が出ました。教員生活の間、いろいろな形で外国へ出かけましたが、今度はお念仏を称えに行くのです。梅窓院で称えるも、ハワイで称えるも、念仏は念仏であるという気持となり、二つ返事でハワイ行を承知したのです。

そして、昭和四十年に帰国しましたが、私にのこされた、やるべきことは何か、それは念仏を称える以外になんという心境になっておりました。かつて阿川貫達上人が「浄土宗侶たるものは、一日に最低一万遍のお念仏を称えるべきである。」と、いったことがあります。その当時は、冗談ではない、そんな暇がありますかと、いいたい程だった気持も、帰国後はわかるような気持となり、その年に一万遍、翌年二万遍、そして四十三年からは毎日三万遍のお念仏を称えるようになり、今日に至っております。

三、わたしの念仏観

以上が私のお念仏の生活の回顧録であります、このお念仏についてはつぎのように考えております。

法然上人の一枚起請文に、

「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」とあります。このおことばを素直にうけ取り、また三心の第一の至誠心（本当の心）、四修の第一の恭敬心（うまやいの心）の心を一にして、いつわりなく本心からの念仏をすることこそ大切であると考えます。

阿弥陀経には、

「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名ずけて極楽という、その土に仏在します、阿弥陀と号し奉る、今現に在しまして説法し給う」とあります。

ここにいう「西方十万億の仏土を過ぎて」とは地理的にいう西方ではありません。それではどうか。観無量寿経の日想観に、

「みな日の没するを見よ。正坐して西に向い、諦かに日を観ずべし、心をして堅住し、想を専おもにして移さざらしめ日の没せんとして状懸鼓かたちけんこの如くなるを見よ、目を閉じ目を開くにも、みな明了めいりやうならしめよ」とありますように、太陽が西に没するをいうのです。そ

して大きな太鼓が宙に吊されているようにして、ドット西に没していくのをジット凝視し、眼を閉じてても開いても、それがはっきり心にみえるように努めます。そういたしますと私達の心はすっかり静まり、落着いて日頃の騒がしい動きやすい心とは全く違った澄みきった心となるのです。そこに開けた世界が極楽です。それは私達の日常生命の騒がしい世界とは全く異った、遙か遠いものです。この遙かに遠いということを「十万億土を過ぎ」と述べられたものと存じます。しかし同じ観經に「ここを去ること遠からず」と、説かれてありますように、非常に遠いところではあるけれども、また遠くもない、そこが西方極樂浄土であるとうけ取っております。浄土宗のお寺は阿弥陀さまをご本尊としてお祀りしておりますが、正しくいま申しました西方極樂浄土からお迎えし、本尊様としてお祀りしているのです。立像の阿弥陀さまならば、右手を上、左手を下にしておられます。右手は知恵を表わし益々高く悟りを開き、左手は慈悲を表わしひろくすべての人々を救うことを表わしております。この知恵と慈悲に満ちた阿弥陀さまに向って、私達は一心に「なむあちだぶつ……」と心をはこぶので

す。するといつか私達の心は阿弥陀さまのような心になってくるのです。はっきりとはしませんがなってくるのです。更にかさねるとははっきりしてくるのです。即ち自然に知恵と慈悲が具わってくるのです。

私は子供を亡くしましたが、「あの子はなんで死んだのだ」とか「私はどうしてこんなに不幸なのか」とか「あの奴は本当にいやな奴だ」とか、日常たえられないことがありますとき、「なむあみだぶつ……」と称えますと、心の落着きがでてまいります。更に続けて念仏申しますと、ほのぼのと心が明るくなって、「ああ、そうだったのか」という気持ちになってまいります。「なむあみだぶつ……」と称えますと、自然にものの道理がわかってくるような気がし、自然に心の眼が開けてくるようになるのです。

四、極樂への道

そのすっかり開けたところが阿弥陀さまの極樂です。このことについて無量寿經下巻に、

「浄土に生れるもろもろの菩薩たちは、なにか説こう

とする時には常に「正法」を述べる。知恵に随順して間違ひと言うことはない。如何なる物に対しても執着心を持たない。進むも退くも去るも来るも感情に支配されない。意のままに行動して全く自在であり、適莫する所がない、彼もなく我もなく、他人と競うとか、訟えるとか言うことをしない。諸の衆生に対して大慈悲饒益の心を持って居る」

とあります。まことによいことばだと思います。この中にあります「競う」ということばに着目すべきです。私はボート選手でしたが、レースに出場すれば勝たねばなりません。しかしそれは本当の道ではありません。また選挙に出たならば勝たねばなりません。しかしそれとて本当の道ではありません。極楽への道ではありません。

それから權威ということばもいけませんね。民主主義は相手の権利を保証します。けれどそれは自分の権利を主張したいから、相手の権利を認めるのです。もとはといえは自分の権利を主張したいだけのことなのです。この權威の気持があるところ、かならず対立意識を生じさせます。この対立あるところには真の平和はありません。

東洋思想、ことに仏教の教えには対立はありません。西洋思想の最も悪い点はこの対立意識があるという点です。今こそ、今の世こそ仏教思想が必要なときではないでしょうか。「他人と競うことなく、訟うることはない、すべての人のためになる」、このことばに今こそ帰らねばならないと思います。

今の世は何故にこうまでひからびてしまっているのでしょうか。人間不在、人間疎外ということがいわれ、いたるところで対立がなされております。これは良い生活をしたい、思う存分のことをしたいからなのです。しかしこれにはきりがありません。

このときにこそ菩薩の心境になることができましたならば、それは正に成仏国土成就衆生であります。しかし残念ながら私達は人間であり、凡夫でありますから、なかなか思うにはまかせません。けれどもそれでも尚務めていかなばならないのです。

「正しく蓮台に手をかけるまで」努めて念仏の中にすごす生活でありたいと思っております。

(『浄土』文化講座における講話より、文責編集部)

高麗義光

(神奈川県・三浦市光念寺住職)

めぐりあひ

一、亀井先生の思の出

人生における邂逅（めぐりあい）の意義を私は亀井勝一郎先生から学んだ。友人の手引でこの高名な評論家を一漁港の教委主催の講演会に講師として招くことのできたよろこびに、司会として立った私はさほど多からぬ聴衆に対し、この会場に縁あって集り、縁あって亀井先生の話をきくことのできるしあわせを力説した。

亀井先生は腕を組み、むっつりとした態度で私の前説をきいていられた。むっつりした様子は私が駅まで出迎えた時から続いていた。会場へ向うタクシーの中でもそうであった。私は先生が機嫌が悪いのだと思った。講演がはじまり、次第

に展開してゆくにつれ先生の顔はようやく晴れやかになった。一同感激のうちに講演は終り、私は主催者と共に先生の接待にかかった。

亀井先生は酒豪ときいていた。銀座の裏街で一人蹣跚たる銀髪白面の先生ともめぐりあったこともある。勿論一面識もない時である。そんな話を肴に宴たけなわとなった。私は訊いた。「先生は車の中でご機嫌が悪かったようですね。」すると意外な返事がかえってきた。「ぼくはね、話をする前にはいつも機嫌が悪いのです。不安なのです。どんな話をしたらよいかな不安なのです。」

何という真剣な人なのか。私はかかる人物にめぐりあい、親しく盃をかわすことのできたことをありがたく思った。酒がまわり、お互いの眼がすわり、酩酊の底で人生が一瞬華や

いで見えた。

お礼に出向いた時に本を一冊先生からいただいた。「旅路」という先生の著書でこの中に「ガン」という題目があった。

「ガンでなくてもいづれ人間は死ぬのだが、死の厳肅性を私たちは忘れてゐる。この恐怖を見ずえることが大切であるう。」と書かれている。しかも先生はそのガンに貴重な生命をうばわれてしまった。私も母親をガンで失ったので、ガンという文字には特別神経質になっているせいか、先生から本をいただいてバラバラめくった時、その文字が強く目に飛びこんで来た。いやな予感があったがそれが現実となつてしまつたのである。

講演会の後で、ある友人が観音の巨像を海岸に建立したいと考え、先頃の亀井先生の宴席にも連つた縁から、この件についての先生の意見をきいてみてくれと私に頼んで来た。観音への信仰心から出たことは事実であつたが、最終的には観光資源として漁港のためにプラスしたいという計画であつた。このことで私が出した手紙に対する先生の返事はこうであつた。

「これは大変むづかしいお仕事です。第一に実際の制作者の意見をきくことが大切です。へんなものができたら却つて

風景を害うので慎重にお考え下さい。実際のことでは私は役に立ちませんし、又場所柄私はどうも賛成できかねます。更に御一考下さるようお伝え下さい。」

亀井先生今や亡く、私は私の人生における先生との邂逅の一と時を空しく反芻するばかりである。

二、或る回心

その紳士は名門の生れでもとクリスチャン、しかもギリシヤ正教の洗礼を受けた人である。

戦時中のことで外地に居住し軍関係の仕事をしておられたのだが、不幸にも男のお子さんを病気で亡くされた。外地のそれも出間の僻地でいざ葬儀をするとなつても教会もない。わが愛する子どもたちのために何らかの儀式をと思つても隣組の念仏講もなければ御詠歌婆さんもない。ようやく禅宗の布教師が離れた町からかけつけて来てくれた。涙にくれる父親が「私はクリスチャンで洗礼はうけたが何にも儀式がわからない。なんでもよいから死んでいった子どもたちのために祈つてほしい。」というのに対して、その布教師は言つたという。「なんでもよいのです。私も頼まれては来たが、私がい

なくたってよかったのです。皆で集って死んだ幼い魂のために、ただ安らげくあれと祈ってやるのがよいのです。それが宗教儀式の原型であった筈です。」

たまたま母国へかえることがあった時、その人は教会をたづねてわが子の葬儀の始末を牧師さんに語ったところ、牧師さんは大いにおどろいて、「何ということを。異教の方式で死者をとむろうとはどうしたことか。あなたもクリスチャンなら、儀式の一通りは心得ている筈、何故クリスチャンの子として天国に送ってあげなかったのですか。」と嘆いたという。牧師さんの言うことも分らないではないが、その人にはあゝの時の禪宗の布教師の言葉の方がつつしりと胸に来ていた。「私は洗礼を受けたが、その後信仰生活する間もなく外地に赴いた。その外地でいとけない子どもを失った。何かにすがりたかった。その時来てくれた禪宗のお坊さんの言われたことは本当にありがたかった。異教がどうのこうのというのはあまりにも狭い考えのような気がする。」

「そこへゆくと仏の教えは何かひろびろしているな。ここで私はキリスト教を離れ、仏教に帰依したのです。」とその人は私に語った。「善人は天国、悪人は地獄。交通整理としてはまことにカッコいい話ですが、悪人なおもて往生す、

いわんや善人おやという親鸞の信仰にはかないません。その親鸞がよき人と尊んだ法然上人の信者となれたのも仏縁あればこそです。」

その人は現在、ある浄土宗の寺の境内に居住していらる。私は縁あってその寺でその人にめぐりあい、盃をかわしたのである。

「母もクリスチャンでしたから、私が教会を離れるといった時は悲しみました。しかし、外地で死んだ幼な子の魂はあゝの禪宗のお坊さんのお経によって救われたのです。そうではなくてはあの子は可哀想だったのです。洗礼は受けても何の祈りも知らぬこの父親を持ったあの子が可哀想だったのです。と私がいった時、母は黙って許してくれました。」という言葉に私は思わず落涙した。

暫く四方山の話をしているうちに私がいった。

「しかし、法然上人は何というひろびろとした方でしょうな。酒のむは罪にて候か。答。まことには、のむべくもなければ、この世のならい。とはねえ。」するとその人は、

「あゝの人ももう少し若ければ親鸞さんのように女房を持たれたかも知りませんなあ。」といって呵々大笑した。

シャンゼリゼー で 南無阿弥陀仏



(東京・港区高輪在住)

大久保文雄

今年の始め、私は欧州旅行の一行に加わって、オランダ・スイス・ドイツ・フランス・イギリスと、その主要都市を督見してあるいた。しかし現代日本の国民の一人として、外国に感化することはいくらもあつたが、改めて驚くことは何もなく、なかつたのである。それ程、今の日本の客観的文化事情は、各国に劣らぬ発達をしているのである。

外国へ入ってから、すべて横文字で漢字を見る機会がまゝたくなかつた。ところが驚いたことは、パリのシャンゼリゼーの表通りの、あるショウウインドで万博のマークをつけた提灯と、そのそばに略装をした南無阿弥陀仏の掛軸を見た

ことである。よく見ると、それは法然上人の選択本願念仏集のはじめに、上人が自書されたという南無阿弥陀仏の六文字を、拡大した刷物の軸であつた。私は思わず胸をときめかせ、しばしその前に立止って、その字に見とれ、南無阿弥陀仏と合掌してしまつたのである。

パリへ来て、日本の銀座通りともいふべきシャンゼリゼーで、南無阿弥陀仏の文字に会するとは想像もしなかつたからである。私はそれまでの旅行のつかれや外国にいつの寂寥さが一時に消える思いがして、ありがたさ、うれしさに心をうたれる思いであつた。

恐らく何千何万の外国人もシャンゼリゼーの街を往き来して、この文字を見たことであろうが、どんな感じをもつたことであろうか。妙な字が書いてある。万国博の宣伝文とでも見たであろう。エキゾチックで面白いと思つたに違いない。しかし、私は、その六文字に晴天の慈雨の如く自分の心に響き、グンと胸をときめかせるものを感じざるを得なかつた。

日頃なに気なく称えていた念仏が、この時程鮮かに感じたことはなかつた。それと共にやはり自分は南無阿弥陀仏と、どこかでつながっていて離れることができぬものとなつていたことを、つくづく実感しありがたいと思つた。



大師のおやま(上)

— 霊 峰・高野山 —

増田 任 雄

(東京・江戸川区在住)

山はいろいろな要素を秘めている。だから山に纏わる話しは多い。山が人間の喜びや悲しみを演じる舞台であることもその一つである。確しかに、山にはドラマチックな要素が多いのであり、そこでは数えきれない人間のドラマが演じられてきた。これほど、人間のほんとうの悲劇や、喜劇を演じてきた生の舞台や劇場も、他にそうざらにはあるまい。また山は常に人間の赤裸々なドラマの主人公であり、その演出家でもあった。これからも山はきつとそうであろう。

「山がそこにあるから登る」という或るアルピニストの言葉がある。この言葉には、山を愛し、登山に優れた関心を示し、そして山に情ろを持てる人間のみが理解できる、自然と人間の交流が深く思索されている登山家の心情をよくあらわ

れていることばである。それは山にそそぐ情ろに哲学すらをも感じさせる深き体験からにじみでた言葉である。

偉大な人間が、山を舞台に多くのドラマを演じ、そこから文化という歴史を創った。釈迦も、キリストも、ゲーテも、ニーチェも皆な山で、あるいは山と対話を交わした人々である。そして人類に優れた送りものをした人々である。山は人間に豊かな文化——宗教・文学・哲学を恵み与えた。

なかでも、山と宗教は深く結ばれている。宗教、それは山が人間に恵み与えた最大のおくりものであるかもしれない。釈迦も、キリストも山を離れて巷間に生きた人々である。けれども、この両聖から山を離してはいけないのである。山が、この偉大なる二人の聖人を生んだのである。

さて、且つて、又今でもそうであろうが、ヒマラヤ山がインド人の物の考え方に及ぼした影響は大きいであろう。なかなずく、仏教は、ヒマラヤ山を「雪山」と仰いで神聖視し、そこから広大な宇宙論を展開させていったのであるが、お釈迦さまの説法の地として「鷲の棲む峯・靈鷲山」は、仏典に広く説かれて識られている「聖なる山」でもある。仏教も山に深い関心を示している。

我が国にも、靈峯・聖山と呼ばれて、人々の心に奥深く親しまれている山が多くある。日本に仏教が伝来すると同時に、多くの高僧方が傑出されたのであるが、その高僧と言われているお坊さんがたも、多く、山に目を向け、心を魅かれている。

比叡山と伝教大師最澄、高野山と弘法大師空海、この両哲が開かれた二つのお山は、その思想的薫風と相俟って、わたしたち日本人の心奥に底深く知れ恒っている。そして、さらにこの二つのお山から、汲めども尽きない日本文化の二筋の流れが湧き出でたのである。

日本で「山」といえば、それは比叡山をさす。それほど、このお山には、山のもつ深い意味あいがある。且つて、我が国の多くの知識人は、挙ってこの比叡山に学んだの

である。良忍上人、法然上人、親鸞上人、栄西禪師、道元禪師、日蓮上人など、こうした日本仏教に、つまりは日本の文化に計り知れない貢献のあった優れた先哲がたが、伝教大師最澄の遺徳を慕って比叡山を訪づれたのである。そして、これらのインテリがたは、比叡山から各自の思想を自由に汲み取って下山していったのである。きつと当時このお山の教風は、麓の都大路はもちろんのこと、また都を東西、南北に遠く離れて全国に、新鮮な思想の旋風を吹きまくっていったにちがいない。それが鎌倉仏教の名で総称されている新しい仏教の抬頭なのである。だから比叡山は、日本文化の二筋の流れの一流をなしていると言われるのである。そして、このお山も、日本のひとびとに素晴らしい送りものをしてくれたのである。その意味で、比叡山は、人間にとっての「山」を、日本人に思わせる山である。比叡山はいわゆる「山」なのである。

この且つて日本の知性の総府であった「聖山」としての山、比叡山に対して、わたしたちには、弘法さまの名で親しまれている弘法大師空海の開山になる「靈峯・高野山」があることを知っている。この弘法さまのお開きになった靈峯・高野山にも、そこには叡山にも増して古い歴史と、多くの秘

話が隠されている。

ところで、ここに比叡山を「聖山」と呼び、高野山を「靈峯」と呼んだのには些か理由がある。それは、比叡山が教、学、の道場として多くの思想家を生んだ山風を持っていたのに対して、高野山が信仰の山として靈場の性格を色濃くしているからである。もちろん、高野山にも多くの学僧と云われているお坊さまがたや、文人が登山されている。先の叡山から輩出された高僧のうちにも、たとえば親鸞上人や日蓮上人などがおり、そのほか歌僧西行法師や俳聖・芭蕉なども高野山を参詣している。けれどもそれは比叡山が知識人を輩出したこととは意味が多少ちがう。事実、比叡山からは前述のように多くの学僧が生れたのである。が、それに対して高野山から学僧が多く輩出されたことは聞かないのである。概して、叡山は学僧を育てたのであり、高野山は信仰を育てたのである。特に、中世以後から活躍し出した「高野聖」と呼ばれた多くの聖僧は、高野山の荒廃を救けるとともに、高野山を中心に全国各地を聖行脚して、民衆のあいだに靈峯・高野山の信仰をひろめたのである。そして、ここに衆人の信仰が「靈場」としての高野山を現在に遺している。奥の院へ至る参道の両側に立ち並ぶ無数の墓石群は、その現在への証しであ

る。それは、今以って死者の靈を高野山に送る納靈という分骨の風習で、高野山の信徒に受け継がれている。信仰の山として、靈峯・高野山は、比叡山とはその山風を異にしているのである。が、是く言ったからとて、高野山は決して思想を軽視しているのではない。先ず、何と云っても高野山は日本密教の総本山であり、それは天台密教たる叡山の比ではない。事実、高野山は密教美術の豊庫なのであり、多くの優れた密教芸術が現在されていることは周知の事実である。また先の高野聖が高野山にもたらした浄土教美術の豊富な現存は、高野山が都を遠く離れているという地理的条件と相俟って、この密教の深山に浄土教の信仰が護持されていたことを物語っている。高野聖は、特に中世以後のそれは浄土教の流れを汲む人々の集団なのである。俊乗房重源という東大寺再興の勸進僧を務めた人は、中期高野聖の傑物であり、浄土教の流れを汲んでいる人であったという。高野山は浄土教にも深い関係がある。

かく、高野山にも多くの思想が育まれていた。それがこれから詣でる大師のおやま靈峯高野山なのである。

閑話休題

——お念仏とお題目——

梅雨が中休みといった感のする、澄みきった青空のひろがる六月の末、私は三つになつたばかりの孫の手を引いて、三崎の知人の家を訪れた。横須賀に近づくにつれ、電車の窓越しには、海が見えかくれしている。

「ボクちゃん、ほら海が見えるよ」

「違うよ、あれは太平洋っていうんだもん」

いつ覚えたのだろう。多分、テレビか何かで知ったのであろうが、訳のわからぬことばをいうかわりに、時として驚ろかされることばを耳にすることも、しばしばである。

こんな孫が最近、仏前にむかう私のうしろで「ナンミョウホーレンゲキョウ……」といいだしたのです。私は祖先よりの念仏信者であると自負しておりましたので、この孫のお題目には、いささかショックでした。

そういえば、私の住いのまわりには創価学会員が多くいることは事実です。この辺りから聞き覚えたらしいのです。

別に気にする程のこともありませんが、お念仏を称えるうしろで、お題目をいわれてはおちつくこともできません。そうかといって、三つの子供にいい聞かせること、このことこ

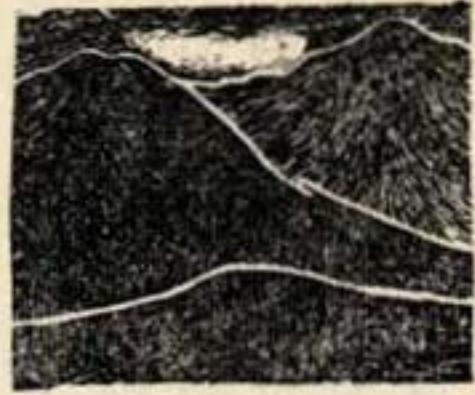
そ無理なことです。

こんな日々が続いたある日、新聞の記事が眼にとまりました。それは前東京教育長で、現在立正女子短大学長になられた小尾さんが、「人間が逆境に立たされたとき、自然口に出てくるのがお題目であり、お念仏はすでに死を覚悟したときに出てくるものである」と、いった内容の原稿を寄せておりました。

これを読んだ時、イメージ的にはなるほどと思いました。が、まことの信仰心ある人では理解し得ない、机上の空論でしかないという感を強くいたしました。

確かに、人によっては各々の人生の浮き沈みにより、その信ずるところを変える人もありましようが、生きている時はお題目、死にかけたならばお念仏では、私たち念仏信者にとつては、だまっていられない問題です。

三つの子供のことばならいざ知らず、教育界の重鎮と目される小尾さんとしては、いささか軽はずみの言といわねばならないでしょう。信仰とはその時、その場かぎりのものではありませんし、ただ一言でいいつくせるものでもありません。人がこの世に生きるかぎり、表となり、かげとなって、私たちの心のささえとなるべきものでありましよう。(N・H)



——遠くなつたふる里——

安居香山

(大正大学助教授)

三月の寒い雪のさんさんと降る日、私は最愛の、そしてただ一人の母の柩を、野辺の地深く葬った。あの黒いつめたい土の穴の中で、静かに手を合わせている母に別れをつげ、僅かに土をつかんで母の柩に注いだとき、母との別れは終に永久のものとなつてしまった。

「お母さん、さようなら」

私は心の中で、ふりしぼるような叫びともつかぬ別れの言葉を、母の柩になげかけた。それは言葉そのものとなつては出てこなかったが、そう叫ばずにいられたものが、私の心をゆすった。そして、野辺送りの人々が、土饅頭をつくり提灯や旗で墓を飾るのを、うつろな目でみていた。遠い幻想が、とめどもなく、私の頭をかすめた。

私は、不幸にして「お母さん」と呼んだ記憶が余りない。十才の時に故郷を出て、京都の寺に小僧に入つて以来、私は

他人の世界で育てられた。そこには、第二の、そして第三の母があらわれ、時にはやさしく、そして時には厳しく育ててくれたが、所詮それは、他人の世界であつた。その内に、私は生みの母が、いつしか他人のようになって行つた。極くたまに故郷に帰つても、たまにしか会わぬ母に対して、「お母さん」という言葉は仲々出てこなかった。それと共に、私は母への愛情や、母からの愛情さえも見失ひ勝ちとなつた。特に小学・中学生の時代にはそんな感じが深かつた。こうした感情を持つようになったいきさつには、未だ未だここでは書き得ないいろいろなこともあるのであるが、今にして思えば、こうした母への愛情に浸り切れなかつた私は、一面では誠に不幸ではあつたが、又一面ではこうした他人の世界での苦勞をさせてくれた母に、無限の感謝を今日では捧げている。それはしかし、相当に年をとつて分つてきた事であつた

世のすべての母がそうであるように、私の母も人一倍、子ぼんのうな人であった。そうして母がこの私を小さい時から旅をさせた事を思うと、母の心の苦しみも、並たいていでなかった事と、今更のように察せられてならない。いつかゆっくりそんな話でも母として思う内に時のみ過ぎ去り、そして終に私は、そうした事をしんみり話すこともないままに、更にはそれについての心からなる感謝の言葉を捧げることもないままに、ここに母の野辺送りをするまでになつてしまつた。母の柩をみつつ、静かに私は、ありし日の母を追憶して慚愧に暮れた。

○

母は八十五才の高齡で世を去つた。それは人間として決して短い生涯ではなかつた。いや、これ程までに永生きできた母は、誠にめぐまれた人生を送つたと言えよう。しかし、私にしてみれば、たとえ床に臥せていても、もっと生きていて欲しかった。それは、人の子が誰しも持つ感懷であろう。私のように、母との五十年近い生涯の中で、その殆んどを母とは別の世界に住んでいただけに、せめて故郷に帰つた時位、ゆっくり母と生活を楽しみたかつた。京都に行った時、私は必ずと言ってよいほどに、滋賀の母のいる故郷に立ち寄つ

て、一夜を夜遅くまで語り明した。別に特別な話があつたわけではない。極くありふれた世間話である。小学校もろくに出ていない母には、難しい話は無理であつた。東京の珍しい話をしていれば、母は喜んでいた。

「明日は何時に帰るのかね」

故郷に着くなり、母はすぐ尋ねた。

「せめてもう一晚位、よいだらうね」

二言目はこれであつた。母にしてみれば、切角来たのだからという気持ちであらうが、私の忙しい日程では、一晚がせいぜいであつた。しかし、母はそうはいふものの、一晚でも来てくれた子供に、無限の喜びを感じていたに違いない。私も、生涯のせめてもの恩返しにと、できるだけ故郷に立ち寄つた。

「土産は何がよいかね。餅をつこうか」

「いや、卵でももらえばよろしいです」

しつこいように母は私に土産のことを尋ねた。何か持たしてやりたい。そんな気持ち一杯で、それを用意してしまわないと、母は落ち着かなかつた。卵はいつでも用意されていたようである。突然行つても、二十や三十の卵はいつでもあつた。ない時は、村中を廻つて集めてくるようであつた。田

舎の土産は何でも重く、私は閉口した。米にしても、餅にしても野菜にしてもある。それで私は、一番無難な卵にきめているのであるが、時にはとうとう重い餅を一箱持たされることもあった。しかし、切角造ってくれた餅と思うと、断つた時の母の気落ちした姿が見るに堪えず、表面喜んでもらつて帰った。そして、結局、重いからと言って途中で捨てるわけにもいかず、東京まで持って帰った。考えてみれば申し訳けない事であるが、母とのやりとりには神経をつかった。しかし、今やその母はいない。私の苦労もなくなったと言えはそれまでであるが、母のあのしつこいまでの愛情をもうもらうことができないかと思うと、淋しくてならない。故郷が何だか一步遠くへ行ってしまったような感じで、足が重くなつてきそうである。

○

この二月初旬であつたか、田舎の姉の子が結婚するので久々に故郷に帰った。相変らず母は喜んでくれていたが、今までと大分様子が違つていた。一段と忘れっぽくなり、子供のようになつていた。兄の話によると、時に表に出て、自分の家に帰る道さえも忘れることがあつて困るという事であつた。その頃、私は井上靖の「月の夜」という母を書いた小説

を読んでいた。年とつた母が次第に子供のようになり、忘れっぽくなり、わがままになつて困るという事であつた。井上靖は、そうした母に対して無限の愛情を込めながら、兄弟で苦勞するいきさつを書いていた。それは丁度私の母にも言える事であつた。兄たちは全く困つたと言つていたが、たまに行つた私には、それ程に感じなかった。時にはとんちんかな事をいうのが面白くて大笑いをした。私が笑うと、母も一緒に笑つた。その笑い顔は、まるで子供のようにあどけなかつた。母も子供に帰ってしまったなあ。私はそんな感懐にしたつた。

結婚式でもあつたので、私はこの時は二晩田舎にとまつた。しかし、その時、突然私をしげしげと見ていた母は、

「おまえは誰だつたかね」

と私に問いかけた。この時ほど私は驚いた事はなかつた。

始めは余りのおかしさに大笑いしたのであるが、次の瞬間に、自分の子さえ忘れた母となつてしまったかと、淋しい限りであつた。勿論こうした忘却はすべてではなしに、又元の記憶にもどつたので私は救われたが、子供のようになつて行く母のこれから先は、余り永くないのではないかと、ひそかに心に覚悟をきめた。

しかし、私が驚き、又喜んだことがあった。それは、あれ程までに物忘れをし、生んだ子さえ時に見分けがつかぬ母が、毎朝の読経は一字も間違えずやってくれていることであつた。二日目の朝、まだ寝ている私の机辺で、母は蚊のなくような声で読経していた。私は、思わず聞き耳を立てた。もしや母はお経を忘れてはいまいかと。

「我建超誓願、必至無上道……」

あぶなげな木魚の音と共に聞えてくる母の四誓の偈は、しかしながら一字も違っていなかった。

「母の信仰は確かだ。往生うたがいなした」寝床の中で、私はそう思った。いよいよ帰る時になって、今までとんちんかんな事を言っていた母が

「土産の卵は持ったかい。忘れるでないよ。では元気でな」と言つて別れをつげて門に立った。物忘れをするこの母も、子供への土産のこと、卵のことは終に忘れなかったのである。

「お母さんも元気でな」

こんな事を言つた事もない私は、思わず母の肩を叩いて別れを告げた。私はこれが或いは最後になるかも知れぬという予感があつた。あの時の母の肩の骨ばつた感触は、今も私の

手に残っている。

それから一月もたたぬ或る夕方、それは彼岸の入りの日であつたが、私が多くの人々の好意により造つた念仏堂の落成式の案内状を書いている時、母の赴を耳にした。私の予感は適中したのである。

○

もう帰らぬ母の柩を野辺に送り、うず高くつまれた土饅頭の前にしやがみ、「歆譽妙喜法悦禪定尼」という塔婆に目をやりつつ、私は永かつた母の生涯を追憶した。私にとっては余りに偉大であつたこの母は、念仏行者としても、一人の母としても、人間としても確かに偉大であつた。何かの機会にもっとこの母を顕彰したい。母と私との間には、数多い物語りがある。そんな事を、とめどもなく考えていた。

墓の前には、九谷焼のご飯茶碗と、青貝ずりの箸が供えられていた。これは私が母の七十七の祝いの時にあげたものであつた。母は以来、大切にこれをつかつていてくれた。そして今は、墓にまできているのである。

それにしても、この母のいなくなった故郷は、なんと物悲しく淋しいことであらうか。何か私には遠くなった故郷のように思われてならない。



綾子の出家 (上)

吉野 翠 幹

(神奈川県足柄下郡在住)

急用でもないのにお得意の客が、商用のために工場にまで訪ねてくれることは、減多にないだけに政吉にとって有難いことであつた。特に今日のお客は可成りまとまった取引きでもあつたし、いつもならば後で近所の料亭に案内し、一献差し上げてよい部類のお客であつた。

しかし今日の政吉はそれどころでなく、心に少しの余裕がなかつた。相槌一つうつにしても相手に失礼にならぬように努力するのが精一杯のことであつた。それというのも昨夜突然に綾子が家を出たいといひだしたからであつた。丁度応接間の真上にあたる綾子の部屋では、恐らく身の回りの品々を整理しているかも知れないと考えていた。

政吉は今日の相手がいかに大切なお客であつても、応接に焦れ切っていた。政吉の注意は、綾子の部屋から洩れてくる物音に向けられ、全身の神経を耳に集中していた。それと同

時に綾子の出家をどうしたら食い止めることができるだろうか。何んにしても綾子の考えは突拍子のないことであり、世間知らずの乱暴極まることであり、政吉にとってとうてい許すことのできないことであつた。綾子の決心はほんとに堅いのであろうか、それとも一時の思ひつきなのであろうか。一睡もできなかった政吉の頭の中は、この考えの間をぐるぐる廻るだけでいまだに何れとも判断しかねていた。

綾子は手数のかからなかつた子であつた。氣質が素直で、たれかれにも明るい感じを与え、大勢いた職人たちにも可愛がれ、何不自由なく育ってきた。ただ一つ気になるといえば、政吉が綾子の母と分れた時はまだ幼かつたにしても、政吉が今の妻と再婚したのは綾子が中学に入つたばかりのことであつたから、綾子にとってその時の印象は後々に至るまで明瞭に残っているに相異なかつた。

綾子が高校の時に、妻が進学係の先生と懇談して帰ってきていった。

「綾子さんは成績がよいので、ほんとに肩身が広くて嬉しくて」

政吉にしてもこういって喜ぶ妻の顔をみて嬉しかった。

また綾子は、同じ頃のこと、

「お母さんのことを、お友達が姉さんみたいだっていってたわ」

といつて笑ったことがあった。

今日までのところ妻と綾子の関係は、いわゆる継母と娘といった難しさを少しも感じさせないでくれた。この点政吉は人知れず二人に感謝していたものであった。

それにもまして政吉が幸福感を味ったのは綾子が大学に進み、妻と二人で入学式に参列した時のことであつた。綾子が大学生になつて、堂々と大人の仲間入りしたことは、政吉にとって胸を張って歩いてみたい晴れがましい気持であつた。

ところが綾子の大学でも御多分にもれず、一部の学生が騒いでいた。新聞等で女子学生の無軌道な籠城話や、女子学生と思ふような活動が報道される度に、大学に入れてよかったかどうか迷わずにはいられたかつた。

綾子は大学生になつたといつても、余り通学している様子でもなく、家にいる日が多かつた。そこで政吉は工場の事務を綾子に手伝わせることにした。これには政吉に二つの狙いがあつて、一石二鳥となるかも知れぬと甘い考えを持っていた。

政吉は工場の職人や事務員が次第に減つてゆくのに、その補充が実に容易なことではなかつた。それに政吉自身は外廻りが多いので、銀行の預金と当座をまかせられる者が欲しかつた。もし綾子が工場の現金出納を引き受けてくれたら、政吉も安心できるし、綾子が工場の経営に興味を持ってくれたらこんな好都合はないと思つた。それにもう一つの狙いというのは、綾子が工場の経営に本気で手伝ってくれば、授業のない大学に通わせることがなくなり、退学を勧める機会が来るかも知れぬと考へたのであつた。

それに政吉は同業組合の役員を引き受けて組合事務所に詰めることが多くなつた。いつの間にか綾子はれっきとした出納係になつていたのであるが、大学の授業が開始されることになつて、綾子の通学も始つた。

政吉の狙いは水泡に帰したかたちとなつたが、この方が当然の成りゆきであつたので止むを得ないことであつた。

ところが一月ほど前のこと、妻はいい難くさうにしながら政吉に、

「近頃、綾子さんの帰りが遅すぎはしませんか。心配ですわ」

と囁いた。政吉も綾子の遅い帰宅のことは知っていた。しかし週に一度位、帰りが遅くなっても学生同志の付き合いもあることだしもっと綾子を信用していて大丈夫であろうと考えていた。それが最近では毎日のように綾子の帰宅が遅かった。綾子さえ確りしてくれればと思っていたが、妻から注意されてみると、今まで何故綾子に注意しなかったのかと急に悔まれてきた。

それにもまして最近の政吉を悩ませ、憤懣の情をかきたてていたのは深夜になって綾子にかかる電話のことであった。政吉にとって十一時すぎは深夜であった。どのような用件でかけてくるか判らないが、政吉は綾子に引きつく気になれなかった。たまには女の声の電話もあった。そんな時にはレコード音楽が混って聞かれた。

明くる朝、綾子に電話のことを伝えると、

「友達の紹介で、一度会っただけよ」

と平気で答え、余り問題にしている様子でもなかった。そ

れにしてもいくら断つても電話をかけてくる男たちの無神経さ、無礼さに政吉は目に見えぬ敵でも見据えるようにして寝つかれぬ夜が続いた。床の中で転々としている政吉にとっては、綾子に対する疑いと不信が次々に湧いてきて、今までの綾子がもう綾子でなくなってしまったように思われた。いつの間に綾子がこんなになってしまったのか政吉にはとうてい理解し得ないままに、悶々とする日が続き、政吉の焦れる気持をどこに持って行ったらよいのか判らなかった。

こんな政吉と綾子との関係は、ついに最悪の險悪状態に落ち込んでしまった。それも昨夜のことであった。職人たちが帰ってしまったと、工場は空家のようにがらんとしてしまい二階の居室にいる政吉たちまでがどこか遠くの所にきてしまった感じになった。妻は台所で夕食の片付けをしていた。二人の幼い子供たちはテレビに夢中になっていた。政吉は独りで夕刊をみていると、いつになく綾子が政吉の前に座った。政吉は何かあるかと直感しながら対座すると、綾子はいった。

「お父さん、わたし家を出ようと思うの」

政吉は自分の耳を疑った。急に血が頭にのぼったように軽い目眩いを感じた。

「家を出る」

政吉は思わず鵲返しに一言いって、後に何んといったらよいのか言葉に困った。心の中に昂ってくる気持を押えようにもその方法がなかった。

「家を出て、どうしようというのかね」

極力冷静を装ってやっとこれだけいった。

「わたし、独りで暮すことにしたの」

政吉は喉がからからになるのを感じた。低い声で、独り言のようにいった。

「独りで暮す。馬鹿な。お前にできるものでないんだ。そんなことをしてみなさい。お父さんは一切お前の世話をしないよ」

怒ってはいけない、怒ってはいけないと政吉は自分で自分にいいかせた。当り前のことを当り前にいった心算であった。それと同時に政吉はいい知れぬ恐れに戦いた。これ以上、妻や子供たちの前でいい争うことはいけないと思い、少しでも時間の余裕をおきたいと思い。綾子の部屋に行つて話し合うことにした。

綾子の話によると、働く場所については内々腹案があるというのであった。そればかりでなく、綾子はすでに引越す先の下宿と契約まで結んであるということであつた。

そして綾子は最後にいった。綾子は政吉と相談をすれば反對されることは自明のことであるから、一層のこと無断で家を出ようと思つていたというのであつた。しかしそれでは親に心配をかけすぎるので、一応の相談をしたまでであるとかつた。

これではまるで宣告である、政吉は思つた。親に恩をせがましくいって家を出る娘が世の中にあるであらうか。ただ問答無用といった一方だけの話にすぎないではないか。そこには少しも理由を説明し、納得してもらふ努力がみられないつた。

政吉は綾子をこんな事態にまで追い込むまで、何うして気がつかなかったのか、どうしてお互いに不信を話し合ひなかつたのか、これは綾子だけの責任でなく、親としての責任でもあると思つた。しかし無精に腹が立つた。立ち上つて殴りつけてやりたい衝動にかられた。この際喧嘩をしてしまつては、綾子を外に追い出してやるようなものである。政吉は必死になつて己が感情を押えた。

綾子が家を出なければならぬ理由は何か。いつ頃からこんな考えをおこしていたのか。このような実情が一切判らないことで政吉の頭は混乱してしまつた。

(つづく)

観無量寿経をひもといて

——凡夫のよろこび——

上野 浩

(東京・杉並区在住)



私は何故か観無量寿経が好きである。浄土宗の寺を菩提寺としてもつ私共が、祖先やなき父母、兄弟の霊を寺で廻向してもらうときに、浄土三部経を中心として数々のありがたい經典の一部を読誦してもらうが、そのうち、観無量寿経もその一つであり、森閑とした本堂にこの経文のありがたい一句一句が僧侶のすみきった音声にのってひびいてくるのをきくときは身のしきしまるような思いがする。

観無量寿経は紀元一世紀の半ばに成立したとみられる無量寿経や阿弥陀経よりさらにおくれて、中央アジアあたりで作製されたものといわれるが、なかにに中国において撰述されたものではないかという人もある。また、この経の内容の解釈については中国とわが国とを問わず、古来数知れぬほど多くの名僧智識によってその訳註が発表されており、その解釈

ももつばら、聖者のための経であるとしたり、あるいは本為凡夫、兼為聖人のものであるとしたりしている。しかし、私共多くの在俗の凡夫にとっては少くとも釈尊の教えを伝えているものならば、經典の作製された場所などは何処であつても差支えはなく、原典の出所が別にインドでなくともいいのであり、また、たとえこの経の一字一句が詳しく把握できないとしてもさしたる支障はないと思われるのであつて、凡夫は凡夫なりにこの経から受けとめるべき心があるはずであり、それをそのまま大切にすればそれでもいいと思うのである。そういう意味で私はこの経の、ありがたい一句一句のうちで、特に印象的に感ずる一、二の箇所をとりだしてみたいと思う。

まづ第一に次の句に眼をひかれる。「ときに韋提希は礼し

おわりて頭を挙ぐるに、世尊。釈迦牟尼仏を見たてまつる。身は紫金色にして百宝の蓮華に坐したまえり。目連は左に侍し、阿難は右に在り、釈、梵、護世の諸天は虚空の中に在りてあまねく天華を雨ふらし、もって供養せり。」

古代インド、マカダ国の王妃韋提希夫人が身は最高の地位にありながら、業を背負うた宿命の人間として受ける大きな苦、骨肉あいはいはむの苦に悩んで遂にこの世に絶望を感じ、日頃親しい目連尊者と阿難尊者の力によってこの苦より救われたいと願ったときに、靈鷲山におられるとばかり思っていた釈尊その人が思いがけなくも夫人の眼前にあなわれ、仏教守護の多くの神々は虚空にあって花をまき祝福したのである。その時の夫人の何物にもかえがたい喜び、また、その時の釈尊の尊い、ありがたいそして光りかがやいた姿、何という莊嚴な情景であろうか。この時の韋提希夫人の苦しみは今日の私共の苦しみであり、釈尊の尊い姿は今日の私共にとっても心の中に慈愛あふる姿となつてうつしだされるのである。次に私は次の句に打たれる。「未来世の一切の凡夫にして浄業を修せんと欲する者をして西方極楽国土に生まるることをえせしめん。かの国に生まれんと欲する者はまさに三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして

殺さず十善業を修す。」

現世においてもろもろの煩惱にもかく人間に釈尊は西方十万億土に阿弥陀仏の極楽浄土のあることを教える。四苦八苦する現世の人間の心に光明にみちた極楽世界を浮かばせようとする。そして極楽に赴くために浄業を修めるべきことを説く。そのうちでも特に父母に孝養をつくすべきであり、師には尊敬の念をもって仕えるべきであるという一句は、私共が今日の現実を生きる上において何と必要な、ありがたい教えだろうか。現代の多くの人々は全くこの教えを忘れ去つてしまっているのではないだろうか。今日特にこのことをつよく感ずるのは私だけだろうか。倫理の混乱した現代、あらためてこの言葉をかみしめてみる必要はないだろうか。原始仏教においても子の親に対する義務として特に子が親から受ける恩の大きさをゆえに「母または父が老いて朽ち衰えているのを養わないで、みずからは豊かに暮す人——これは破滅への門である。」と教えており、また師弟の関係についてはすでにウパニシャッドにおいて「師を神として敬へ。」という教えがあり、この教えを仏教はずっと受けついできているのである。

さて、中国の善導大師によるとこの経において釈尊が韋提希夫人のもとに應じて極楽世界に往生するための教えをい

ろいろと説いたものが聖者のための教えとしての定善観であり、また、釈尊が自ら進んで説いたものが散善観であるといわれるが、そのうち上、中品は根拠の高いものを対象とする教えであるので、これらはしばらくおき、私は散心の凡夫の往生を説いた下品、それも下生のうちの次の一句に深い感激をおぼえるのである。「汝よ。もし念ずることあたわざればまさに無量寿仏を称うべし。」と。「かくの如く至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀仏を称えしむ。仏の名を称うるがゆえに、念念の中において八十億劫の生死の罪を除き、命終るの時、金蓮華のなお日輪のごとくにしてその人の前に住するを見ん。」

思うに私共多くの衆生は殆どすべてが下品下生の凡夫ではないだろうか。根拠の低い、多くの凡夫の救いを説いたこの一句は、たとえ凡夫といえども深い信の心をもって「南無阿彌陀仏」の称名を誦すれば聖人にも劣らぬ救いがえられるということをお教えたものである。ここに法然上人によって説かれた専修念仏の心持がややわかるような気がする。そしてこの経はほんとうは多くの下品の衆生の救いを主にしたものであり、したがって、あらゆる人間を救済しようとする「大乘」の精神をあますところなくいいあらわしているものとい

うことができよう。

思うにこの後、人の世が何千年、何万年つづくにしても人として守らなければならない不変の真理があるはずである。そしてこの経がそのような真理を説いているものであるかぎり、たとえ人の世がいかなる変革をみせようと人の世がつづくあいだはこの経の精神は人々とともに永劫に生きつづけてゆくものと考えられるのである。

“お盆・おせがき”の施本に好適!!

法然上人鑽仰会発行の

『お　　ぼ　　ん』

新書版・表紙共十二頁・価十二円（送料実費）

内容（現代社会と地獄・餓鬼道、母をおもうまごころ、長寿の人生、心のふれ合う豊かな生活をひらく、あみださまにまもられて）

ご用のむきはお早目に本会までお申込み下さい。

道への谷広

和良橋高

道

二十四才のとき比叡山を出て、嵯峨の釈迦堂清涼寺に参籠した法然上人は、そのまま足をのばして奈良に赴くのである。

南都・北嶺といわれて、奈良仏教に抵抗をしめした伝教大師最澄が、比叡山の仏教をうちたてたのであるが、その比叡山仏教より古いのが南都の仏教である。

その奈良の仏教のなかにも、すでに浄土教を信ずる人々がいたことはたしかであるから、法然上人はそれらの人々に直接遇って、自分の浄土教を試めたい心もちで一ぱいであつたのであらう。

そこで一七日の釈迦堂の参籠を終えると、そのまま足を奈良の地に運ぶことになるのであるが、釈迦堂を出たあたりから竹やぶがつづく嵯峨の道である。

足はいっしか大堰川のほとりの嵐山にのびていた。

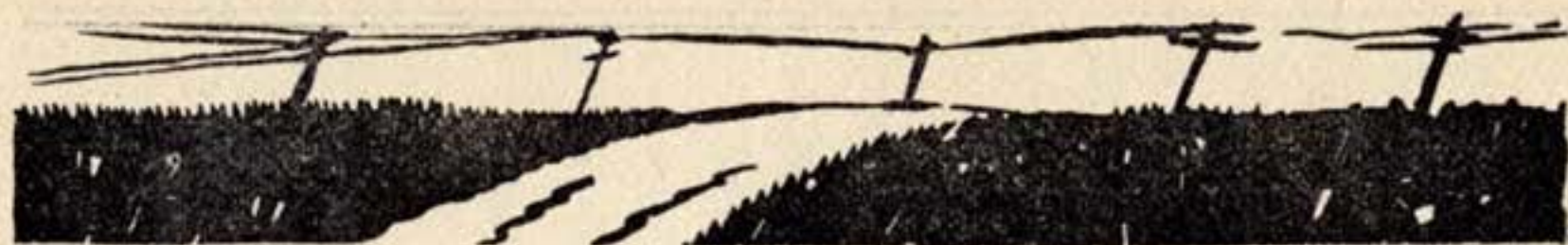
あたりの景色にみとれる暇もなく橋を渡ると、そこから道が開けている。大悲閣や、法輪寺の建物を近くにみて、大堰川の堤の右側を歩いてゆくと、松尾神社の門前に出る。

もうこのあたりは花どきもすぎて、新緑のころであつたのだらう。迫ってくるような嵐山の美しい景色が絵のように心に残るのである。

それから右へ右へと道をとってゆくと、竹やぶがずーっと山すそからひろがって、うっそうとつづくのである。

このあたりは孟宗竹の本場で、そろそろ竹の子も出るころであつたかもしれぬ。

釈迦堂の参籠から、法然上人の心はうんとおちついてきたらしい。それというのも、三国伝来の釈迦如来に自己の体験した念仏のおしえが、直に大衆のためのものであり、その



釈迦如来によって証明されたような心もちになっていたからなのであらう。

——○——○——○——
竹やぶをぬけると、田圃がつづいている。

法然上人はそのなかの道を、西山広谷の方に歩いていったのである。

目あては奈良であつたけれど、それほどいそぐ旅でもなし、もしも布施してくれる人があるなら、この地で一泊させていただいてもよいというので、この広谷の地にやってきたときは、一軒の家に行乞したのである。

たしかその家は茂右衛門という人の家であつた。

茂右衛門は家の前に立つ坊さんの姿をみて、ただちに奥に入つて布施のものをもって、表に出たとき、おどろきの表情をしめしたらしい。

「あなたは旅の方でございましょうが、いづれへの旅でございしますか。」

「わたしはこれから淀を渡つて、それから奈良にまいります。」

静かにこたえる法然上人の姿をのぞきこむようにみると、茂右衛門は、その容姿のきびしさにくらべて、にこやかな顔つきにおどろいたのである。

「まあ、お坊さま、それなら今夜は茂右衛門宅でお泊りくださいませ。袖すり合うも他生の縁でございます。」

そういうながらも茂右衛門は、若き法然上人を抱きかかえるように、家のなかに入れたのである。

宿主の親切さに法然上人は、思わず顔をほころばせて、座敷に通つたのであるが、茂右衛門のこのもてなしに、法然上人も多分面くらつたのかもしれない。

さて、茂右衛門は奥の座敷に通った見ず知らずの僧にいったのである。

「あなたはきっと将来迷える人を救う、立派な僧になられる方と信じます。そのときにはこの広谷の地をお忘れなく、おこしくださいます。」

すがるように法然上人を接待して、何度もこの地への来錫をねがったのである。

この一夜の接待に法然上人は茂右衛門の厚い親切に感激したのであろう。

やがて奈良から、再び比叡山にかえり、そして四十三才で立教開宗したとき、最初に庵を結んだのは、この広谷の地であり、茂右衛門内宅であつたので、衆生済度の第一声がこゝであつたといえる。

古い書物には、

「広谷との号は、土人といえども知るもの少なし、併ら近里にも数代の住人古老は伝え知る者あり、今この山を領する一家にては今もなお広谷と呼ぶ、上人庵室の地、平にして傍に池の形あり、最も寂寞の地なり」とある。

この茂右衛門宅は、今はあとかたもなくなっているが、昭和三十六年の法然上人七百五十年大遠忌の際には、西山光明寺の本山で、同本山の境内に茂右衛門邸宅跡という石の碑を建てたので、今日はっきりしているが、しかしなんのための茂右衛門宅の顕彰であるかは、知る人が少ない。

上人が最初の布教の地であるということではあるが、茂右衛門のはなしは、如何なる伝記にも記されていない。

それだけに法然上人の一つの伝説として、親しみをもつのは私だけではないだろう。





これは『春日権現験記絵』第十七卷の明恵上人の条に収められている絵である。『春日権現験記絵』は鎌倉末期に当時の左大臣藤原朝臣西園寺公衡が藤原氏の加護を春日大明神に発願し、絵所預である高階隆兼や前関白鷹司基忠等の協力によって作成したものであり、二十卷に及ぶ大部なものである。内容は春日大明神の発祥から説き起し、古今の靈験について見聞するところを絵に描き残して、春日明神の信仰を後代に伝えようとしている。但、この中には発願者である西園寺家にゆかりのある靈験譚や春日社と関係深い法相宗の立場を昂揚している面がかなり見られる。しかしいずれにしても『春日権現験記絵』は鎌倉時代の風俗描写に優れており、絵画史上に高く評価されるだけでなく、当時の社会世相を知るのにも格好の資料である。

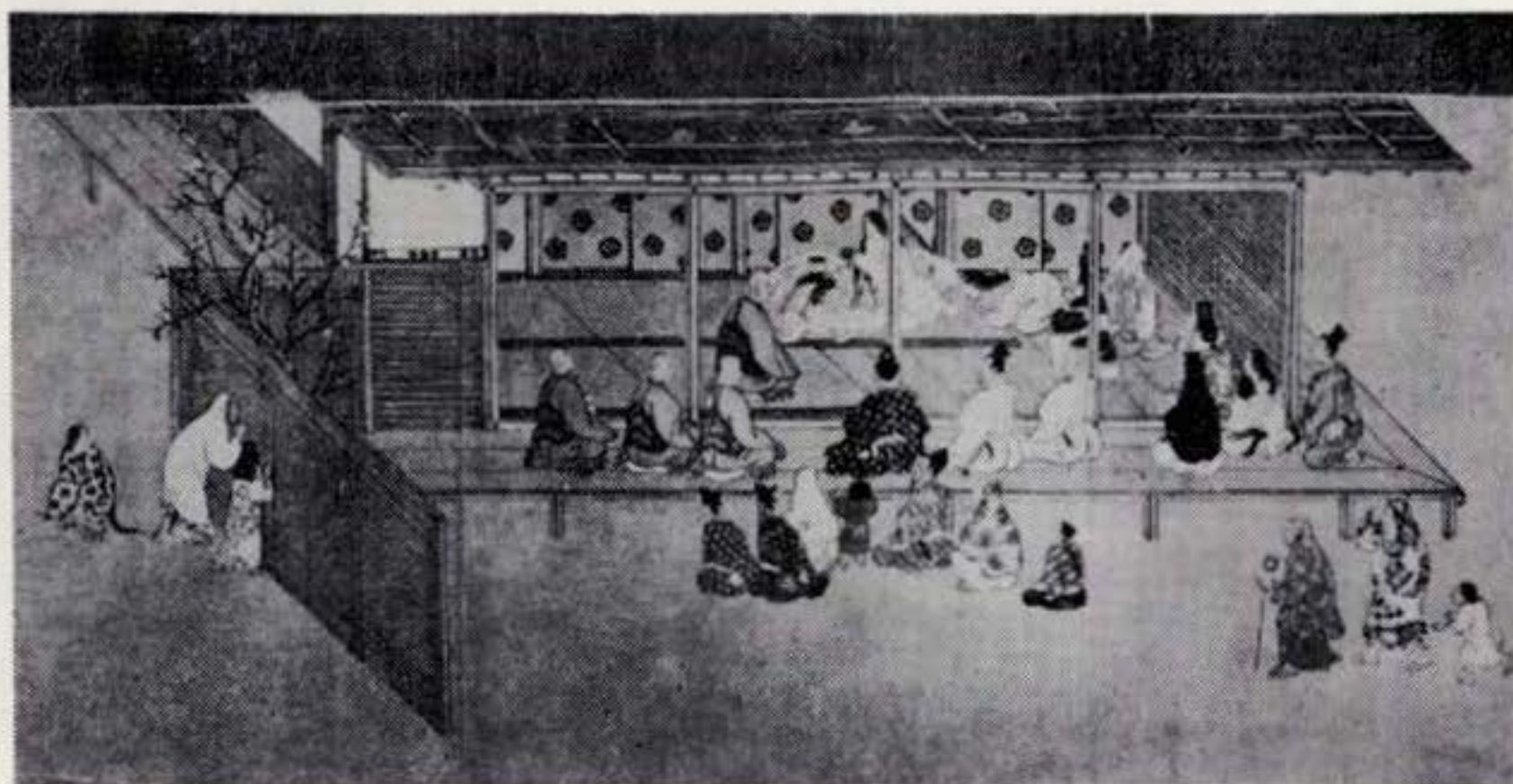
今回はこの中から春日明神の靈験がのりうつった橘氏女の足を諸人がなめて病気を癒している図を紹介したいと思う。

梅尾の明恵上人はかねてより天竺（インド）に渡る願をいだいており、紀伊国白上という所で渡海の念を発したところ、まえから春日明神は明恵上人を崇敬しており、清浄潔斎した橘氏女という女性にのりうつり明恵上人の渡海の志を止め、更に春日山に招いている。この橘氏女は神懸りとなって後、身体から香気を発散し、その身体をなめると甘味をおび、病気はたちまち平癒するという靈験を示した。この図は右上方の部屋の中で橘氏女の足をなめる病女と、この奇端に驚く人々、また同女と語る明恵上人の姿が対照的に描かれている。この図は当時の風俗をよく表わしているばかりでなく、橘氏女が春日明神の神懸りとはいえ、女性の手足をなめる習慣のあったことをうかがわせる興味ある資料である。

（宇高良哲）

鎌倉時代の
治療のいろいろ

女性手足の功用



＝人々橘氏女の足をなめ病を癒すの図＝

「浄土」購読規定	一部 定価 九十円	会費一カ年金一、〇〇〇円 (送料不要)	浄土 七月号	昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十五年六月二十五日印刷 昭和四十五年七月一日発行 定価 九十円 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行人 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 振替東京八二一八七番 東京都港区芝公園十九号地の一 浄土宗務支所内 編集室 法然上人鑽仰会
-----------------	------------------	--------------------------------	---------------	---	---

日本仏教の成果 浄土教のあけぼの

覆刊のあいさつ

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局長 小林 大 巖
浄土宗宗務総長

「浄土宗全書」正統兩篇全巻の覆刻頒行発願以来二十余年、三四師友の契勧を忝うするも、該の資金面に困苦を覚ゆ。関連の近親宗派や、其他に援助を要めようにも、容易にその意をえず、仏祖の慰護と有縁の扶翼を念じつつ、浄土宗開宗八百年を目睫に迎え、焦心しきり願意の暢遂をして止まず。折から昨晚秋、有限会社山喜房仏書林代表取締役青木正雄氏から、師友を介して、該全書全巻の覆刻刊行に必須の財的法的などの一切責任荷負をはじめ、関連諸般の悉皆責務を社をあけて負担に当り、浄土宗や一般人士や社会に対しては、商賈営利を度外視して仏教精神の伝弘に立脚し、念仏信行の策勉奉仕に、赤誠一貫の確約で、覆刻発行に挺身従事の切望を請と、同願師友の激得に依恃し、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局の出版事業の一として、内外大方の覆刻刊行要請に応えるべく、初巻配本を、法然上人聖誕日の四月七日と定めて宿志の具現に、山喜房仏書林の切願を聴諾したのである。この覆刻刊行に際し、師友を煩して、底本の由来や校正の頗末解説や爾来の研考様子の等々を、その責任分担で附すを念いしも先ず覆行をと急ぎて、夫等は他日を期した事情を諒察されたい。

いささか覆刻刊行の来由を略述して、念仏教学の師範人生行路の指標、教化振作の洪軌と仰ぎつつ、先聖の慈悲に報告して、信解行証の策勉を希念してたえない。

浄土宗全書

正 続
四十二卷

- ・ 予約申込規定 全四十二巻予約申込のみに限り出版します。
- ・ 定 価 各 巻 2.000円
- ・ 刊 行 期 日 昭和45年4月7日第一回第一巻発行 / 御申込みは下記発売所又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。 / 内容見本進呈

発 行 所 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

発 売 所 山喜房仏書林 東京都文京区本郷5-28-4 東大赤門前
TEL 03-118-5361 振替東京1900